

渡良瀬遊水池と田中正造を地形図で見る

ダイオキシシンや環境ホルモン、オゾン層の破壊による温暖化といった公害や地球環境についての話題が絶えない。

ここで紹介しようとしている、渡良瀬遊水池と田中正造（一八四一—一九一三）のことは、正直なところ明治時代の政治家で足尾銅山の公害問題と対峙し、谷中村（現渡良瀬遊水池）とともにあった人ぐらいのことしか知らなかった。



佐野市郷土博物館前の「田中正造像」

幾つかの本をめくっていくと、偉大な民衆思想家といわれる彼の考えには、一種独特のものがあることが分かった。

例えば『自治』とは、住民（ただの人）による自発的な地域との関わりによって作られる共同の力が発揮される様である。」とか、「一

部の都市に県立病院を作り維持することは、特定地域の人々のために奉仕することであるから、これを廃止すべきである。

これを廃止すれば、民間病院が進出して地域医療は成り立つから、その県立病院の予算を貧民のための医療費などに費やすべきである。」あるいは、『治水』とは、水系全体で考えるもので、治山を重視し、川の水の自然力を信頼して蛇行させ、限度を超えた洪水は越流させる。従って、河川周辺には遊水の機能を持った土地を確保しておくべきである。」とする考え方である。

約百年経ったいま、中央集権から地方分権へといわれているが、田中正造の思想さえ、未だ到達できないのかと思わせるものがある。

後段の理論も、時代の変化はあるものの、国立病院の廃止、郵便局の民営化論など現在に通ずるところがあり、治水論では現在まで主流となっている、洪水を堤防の中に閉じこめようという高水工事ではなく、洪水を前提にゆるやかに溢れさせる低水工事を主体にしたもので、一見遊水池計画反対と矛盾するかに見えるが、鉱毒被害を隠蔽するためのものではなく、自然な傾斜を利用して利根川の水を江戸川経由で東京湾に流しながら、それでも吸収できない水なら豊かな土地を作るためにも越流させようという考えである。

これは、明治六年（一八七三）に来日し、港湾調査や主要な河川計画に参画したオランダ人お雇い技師のデレーケらの考えと一致するものである。

今でも新鮮な思想の持ち主、田中正造の足跡を谷中村とともにたどってみよう。



渡良瀬遊水池に点在する住宅地跡の高まり

彼と村にとって、避けては通れない足尾銅山鉱毒事件は、慶長年間に幕府の手で開発された足尾銅山が、明治に入り古河市兵衛がこれを譲り受けたことに始まる。古河は、新たな鉱脈を発見した1884年頃から徐々に近代化を進め、富国強兵政策のかけ声に呼応して大増産へと進んでいく。同時に、この年代に入ると鉱山周辺の樹木が枯れただけでなく、渡良瀬川の魚などに異変が起きる。

さらに、一八九〇年（明治二十三年）の洪水などを機に鉱山排水が流出して、利根川と合流する渡良瀬川沿岸の村々の農地では、冠水した稲や桑の木が枯れ、田畑が荒廃し、鉱毒問題が顕在化した。

もちろん洪水は、鉱毒によって起きた山林の荒廃による土砂の流出も引き金になっている。

地元農民は、損害賠償や鉱山の廃止を求めて会社側と交渉を始めたが、進展が見られず、大挙して上京、請願行動へと進展する。

この間、田中正造による国会での質問などにより（一八九一年）、これが社会問題化し、一九〇二年には鉱毒調査会（第一次）が設置され、対策工事などが実施されたが、おざなりなもので根本的な解決に到らなかった。

農民たちは、このとき渡良瀬川沿岸の土と水を採取し、当時帝国大学農科大学の助教授で硬骨の化学者として評判であった古在由直に分析を依頼した（一八九一年）。結果は、「被害の原因全く銅の化合物にあり」というものであった。

古在はその後、前記の鉱毒調査委員となり、付近一帯の徹底調査を主張するが受け入れられず、独自に鉱毒調査を行い、鉱山の不当性を明らかにしたという。

その田中正造であるが、栃木県議会議員、同議長などを経て、一八九〇年から衆議院議員となっていた。一八九一年からこの問題と関わり、当初はあくまでも議会活動を通して請願し、再三にわたって政府を追及した。しかし、遅々として進展しないことに業を煮やした農民は、大挙して請願行動に出ようとしたが、田中も一時は説得に努めたという。

明治三十三年 二月十三日雲龍寺に集合した農民は三回目の請願に東京に向けて押し出そうとして、利根川に架かる川俣橋で警官隊と衝突した。

一九〇一年十二月（明治三十四年）農民を抑えきれなくなった田中は、死を覚悟して、議会から帰途に就く天皇に直訴状を提出しようとしたが果たせなかった。これをきっかけとして、足尾公害事件は広く世間に知れ渡ることになり、世論の関心も高まっていく。

ところが、設置された第2次鉱毒調査委員会の報告も、「被害は現在の鉱山の操業によるものでなく、予防工事以前に排出された河床残留物による」と結論づけ、鉱山の操業停止を勧告しなかった。

そればかりか、代わって浮上したのが、度重なる洪水を防止するために渡良瀬川、思川などの合流地点にあたる谷中村に遊水池を作ろうという計画である。鉱毒問題から治水問題へのすり替える理論に正造は意を決し、議員を辞職して谷中村に入り、住民とともに反対運動に参加した（一九〇四年）。一九〇七年、政府は住民の先祖伝来の家屋を強制破壊したが、田中は、なお村人とともに残留し、人権を無視した谷中村が鉱毒溜化する計画に抵抗した。

この時に指摘したのが、前記の「治水論」である。閑宿の江戸川流入口を広げるなど江戸川の流れをスムーズにしなければ、洪水常習地帯の解決には到らないと訴えた。長くなったが、事件の概要は

このようなことである。

明治四十年（一九〇七）測図の地形図を見ると、利根川中流部の平地部に渡良瀬川、谷田川、思川、巴波川などの河川が蛇行し、氾濫を繰り返しながら合流し、付近の標高は約二十メートル足らずである様子が読みとれる。

同時に合流部の北部にある赤麻池や石川池に代表される低湿地が散在して、氾濫時には遊水池の機能を発揮しているようにも見える。その中であって、標高わずか十七、十八メートルではあるが、下本郷、下宮といった自然堤防状になった地域あるいは、すでに藤岡町となっている旧谷中村内野のように、輪中のように形成された堤防に囲まれた高まりに幾つかの集落が散在している。

この地の約四百五十戸農民は、氾濫の危険にさらされながらも、洪水によって運ばれた肥沃な土砂の恩恵を受けていたに違いない。

そうした中での鉱害問題、遊水池問題である。

谷中村住民は、遊水池を作っても鉱害問題の解決にはならないと、家屋の取り壊しにあった後も、最後の抵抗を続けた。

一九一三年、闘争の中で田中正造は死を迎え、同年遊水池計画は着手された。

その後、一九一九年八月には正造らが起こしていた谷中村不当買収価格訴訟には勝訴したものの、この訴訟は派生的なもので、農民は谷中村に住み続けることはできなかった。

昭和四年修正の地形図では、立ち退きが完了し、河川改修と遊水池化が進みつつあり、抵抗を続けた集落は跡形もない。

実際、渡良瀬川は南流を締め切って、藤岡市街の北に放水路を作ったので（大正七年）、旧赤麻池北端付近から同池を経て、巴波川、思川を合わせて利根川へと注ぐこととなった。そして大正二年に着手し同十四年（一九二五）には遊水池が一応の完成を見る計画であったが、洪水ごとに大量の土砂流入が続き、遊水池機能が低下したため、大正三年から七年にかけて、さらに買収と工事を進め、遊水池

は当初の三倍の規模に広がったという。

立ち退きが完了した後も、多少の問題はあったものの、旧住民には萱の利用などで遊水池の利用が認められていたので、残った住民は地図に見える広大な湿地に生える萱を刈り取り、菅笠やスダレなどの製造に精を出していた。

昭和四十三年編集の地形図ともなると、河川は大幅に改修され、依然として湿地が広がってはいるが、旧図に見られた数十個の湖沼が跡形もないことから、またも流入土砂により堆積が進んだことを示している。

このように、かつての面影は河跡を示す市町村界だけのようだが、地図上の情報が稀薄になったことによって、輪中状になった堤防が簡単に読みとれる。

谷中村のを飲み込んだ現在の遊水池は、その後も堆積が進み、遊水池の機能が低下したこともあり、浚渫を行い貯水池（谷中湖）として整備された。残りの区域には、ゴルフ場、テニスコート、サイクリングロードなどを持つレクリエーション区域となっている。

その中であって、遊水池の西側藤岡町篠山には、旧谷中村農民の共同墓地が、広大なヨシ原の中には村の住居跡をとどめる高まりが見られる。また、公園の中には、役場や住宅跡地が史跡保存ゾーンとして残され、かつての谷中村の悲劇を伝えているが、関心を持つ人は少ない。

今なお風化されない田中の思想に思いを馳せながら地形図を広げてみた。

田中正造の生誕地と墓地は、佐野市の北西約三キロメートルの佐野市小中町に、田中の直訴状などを展示する佐野市郷土博物館は、佐野市大橋町にある。

窮状を政府に訴えようと「人のからだは毒にそみ、悲惨の数は限りなく」と唄う大勢の農民が集まった雲龍寺は、遊水池の北西十三キロメートルほどの渡良瀬川北岸、館林市下早川田にある。（「地

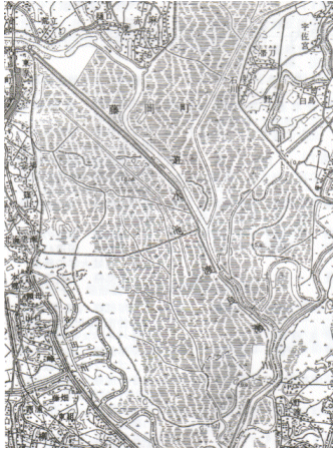
図ジャーナル」1998年陽春号)



五万分の一地形図 明治四十年測図「古河」



五万分の一地形図 昭和四年修正「古河」



五万分の一地形図 昭和四十三年編集「古河」



現在の渡良瀬遊水池（空中写真）

参考文献

- 「利根川改修沿革考（明治年間）」内務省東京土木出張所
- 「日本の歴史 二十二」 隅谷三喜男著 中央公論社
- 「田中正造」小松裕著 筑摩書房
- 「田中正造」由井正臣著 岩波新書評伝選 岩波書店
- 「田中正造」佐江衆一著 岩波ジュニア新書
- 「田中正造翁」 佐野市郷土博物館 ほか
- 「藤岡町史」

Copyright 2012 オフィス 地図豆.